

エドガー・アラン・ポーが苦手とした他者の巧妙で曖昧な言動 —「ウィリアム・ウィルソン」を中心に—

笠原慎一郎

はじめに

エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) の短編「ウィリアム・ウィルソン」(‘William Wilson’, 1839) では、主人公ウィリアム・ウィルソン (William Wilson) の前に、同性同名で生年月日まで同じもう一人のウィルソンが現れる。本論では、もう一人のウィルソンを主人公にとっての世間における他者の一人という観点から考察した。もう一人のウィルソンと主人公との関係は、ポーと世間における他者との関係の投影であると結論づける。

もう一人のウィルソンは主人公のやることに、巧妙で曖昧なやり方で対抗し、反抗した。巧妙で曖昧な対抗や反抗に対して主人公はどのように対処してよいのかわからなかった。

やがて主人公が本当の悪事をしようとする時、もう一人のウィルソンは、それまでとは違って明確で率直なやり方で主人公の悪巧みを妨害する。もう一人のウィルソンの言動が明確で率直なものになり、悪事を何度も妨害されるなかで主人公の気持ちがどのように変化したのか分析する。それによりポーがもっとも苦手とした他者の言動と、それがポーにもたらした影響を解明する。

1

「ウィリアム・ウィルソン」では、主人公が少年時代に通っていた学校の校長の名はブランズビー (Bransby) である。これは実際にポーが少年時代に通っていた学校の校長の名と同一である¹。さらに主人公の生まれた月日とポーの生まれた月日が同じであること²や、大学時代には学生仲間とキャン

ブルをしたことが原因で大学を止めざるを得なくなったこと³など、この短編にはポーの人生で起こったことと重なる部分が多い。そのため主人公の心の動きには、ポー自身が内面を反映している可能性がある⁴。そういったことを考えて、主人公ともう一人のウィルソンとのやりとりには、ポーが世間における他者と接した体験が含まれていると仮定することにも根拠があると思われる。

もう一人のウィルソンについては、主人公の良心⁵と考えると論ずる研究者も多い。主人公が、悪事をしようとする時、もう一人のウィルソンが妨害するため、この見方もまた妥当だと思われる。これに関連して、主人公の心のなかには、相反する二つの衝動があるという見方もあり、心に天邪鬼精神が存在しているとも考えられる。Daniel Hoffman は、“If William Wilson’s double is his conscience, he is also his Imp of the Perverse.”⁶と述べている。

ポーの短編には天邪鬼精神が描かれているものが他にもある。「天邪鬼」(‘The Imp of the Perverse’, 1845) で、語り手は “We perpetrate them merely because we feel that we should *not*.” (VI, 150)⁷ と言っているし、「黒猫」(‘The Black Cat’, 1843) でも、語り手は次のように語っている。

Who has not, a hundred times, found himself committing a vile or a silly action, for no other reason than because he knows he should *not*? Have we not a perpetual inclination, in the teeth of our best judgment, to violate that which is *Law*, merely because we understand it to be such? (V, 146)

「黒猫」にしても「天邪鬼」にしても、してはいけない、あるいは、すべきでないを知っていながら、してしまうという天邪鬼的な精神が描かれている。また、この天邪鬼精神には、したくないことをあえてしてしまうという心理状態も含まれている。

「黒猫」では、語り手がプルートー (Pluto) という名の最初に飼った黒猫を殺すときの気持ちを次のように述べている。

One morning, in cool blood, I slipped a noose about its neck and hung it to the limb of a tree;—hung it with the tears streaming from my eyes, and with the bitterest remorse at my heart;—hung it *because* I knew that it had loved me, and *because* I felt it had given me no reason of offence; (V, 146-147)

語り手は、自分のしていることに悔恨の気持ちをもちながら、猫を殺すのである。本当は、殺したくはないからこそ、殺してしまうという天邪鬼精神が描かれている。

また短編「天邪鬼」の語り手は殺人を犯しているが、巧妙に殺人を行ったため、語り手が犯人であるとは誰も気づかなかった。しかし、殺人を犯してから数年が経つと語り手の心に天邪鬼的な気持ちが見れ始める。そして、ある日、道を歩いていると、その気持ちが高じてきた。語り手は殺人を犯したという事実を告白したくはないのに、告白してしまいそうな衝動に襲われる。そのときの気持ちを語り手は次のように述べている。

“I am safe—I am safe—yes—if I be not fool enough to make open confession!”

No sooner had I spoken these words, than I felt an icy chill creep to my heart. I had had some experience in these fits of perversity, (whose nature I have been at some trouble to explain,) and I remembered well, that in no instance, I had successfully resisted their attacks. And now my own casual self-suggestion, that I might possibly be fool enough to confess the murder of which I had been guilty, confronted me, as if the very ghost of him whom I had murdered—and beckoned me on to death. (VI, 152)

語り手は、この衝動に勝てず、罪を告白してしまう。

野口啓子は、「ポーは、フロイトが広大な無意識の領域を科学的に証明する以前から、自己の内部に自由意志では統御できない何かがあることを確信していた。それを後に「天邪鬼精神」と呼ぶ…」⁸と述べている。さらに「ポー

の主人公はほとんど、多かれ少なかれ、この「天邪鬼精神」に突き動かされているといっても過言ではない⁹とも言う。ポーの描く登場人物たちのなかには、天邪鬼精神に支配され、完全に自己をコントロールできていない者がしばしばいる。

実際にポーの生き方にも天邪鬼的な側面があった。ポーは、ボストンで講演をする機会を得たことがあった。その時に、朗読する約束であった新作の詩を朗読せず、別の詩を朗読して、将来、自分のためになるかもしれない有望な機会をわざわざ逃している。さらにニューヨークへ戻った後には、ボストンでの講演のときの聴衆を侮辱するようなことを書き、世間に敵を作るような行為をあえてしている。また、友人たちが、ポーが大統領に会える機会を作ってくれたことがあった。大統領との会見は、ポーが政府の仕事に就ける可能性を得られるかどうかの重要な機会であった。しかし、ポーはワシントンへ酔っ払った状態で着き、大統領に紹介できる状態ではなく、出迎えに来てくれた人々を激怒させ、フィラデルフィアに送り返されている。ポーは自分の利益に反する、してはいけない行為をあえてするという天邪鬼的な行動をしている¹⁰。

このように天邪鬼精神は、ポーの描く登場人物たちだけでなく、ポー自身ももっていた。天邪鬼精神を抱えた登場人物を描いたのは、ポー自身が、自分ではコントロールできない自己を抱えている可能性を自覚していたからなのかもしれない。「ウィリアム・ウィルソン」でも、もう一人のウィルソンを主人公の人格のうちの一つと考えれば、この主人公もまた自分ではコントロールできない別の自己を抱えていたことになる。

もう一人のウィルソンは実際に存在していたのだろうか。それとも主人公の心のなかだけに存在していたのだろうか¹¹。このことは明確にすることが難しい。また存在していたのか、存在していなかったのかは問題ではなく、存在と非存在の中間に位置しているという見解もある¹²。主人公が学んでいたブランズビー校の級友たちの間ではもう一人のウィルソンと主人公は兄弟ではないかという噂が流れる。さらに後にブランズビー校を去り、イートンの学生になった主人公の前に現れたもう一人のウィルソンは、主人公の住ん

でいる下宿の使用人に目撃され、その使用人は、もう一人のウィルソンからの言伝を主人公に伝えている。そしてオックスフォードでは、マントを残していくというように物的証拠も残す。

しかし、その一方で主人公と全く同じ服装をし、主人公が悪事を働こうとしたときには、主人公のそばにすぐに現れるという人間業を超えたところもある。そのため、もう一人のウィルソンは主人公の心のなかに存在する良心であり、同時に悪行をしたいという欲望とは正反対の衝動を引き起こす天邪鬼精神でもあることは否定できない。しかし、他人にも見える形で存在していたことも否定できない事実であり、本論ではその部分に着目し、主人公の意とは正反対の言動をしてくる世間における他者と、筆者は考える。

もう一人のウィルソンは主人公の言動を監視し、主人公が悪行をしようすると妨害をしてくる天邪鬼精神、あるいは良心のような役割をする他者である。

「ウィリアム・ウィルソン」でのポーの人生と重なる部分を考えれば、主人公ともう一人のウィルソンとの関係は、ポーと、ポーが世間で嫌いなタイプの他者との関係の表れだと考えても無理はないだろう。

2

主人公は、もう一人のウィルソンの攻撃や反抗をひどく恐れていたが、もう一人のウィルソンのこういった言動を恐れているのか考察することで、ポーが苦手とした他者の言動を解明できると思われる。

主人公は、もう一人のウィルソンの反抗に対する気持ちを次のように述べている。

Wilson's rebellion was to me a source of the greatest embarrassment;— the more so as, in spite of the bravado with which in public I made a point of treating him and his pretensions, I secretly felt that I feared him, and could not help thinking the equality which he maintained so easily with

myself, a proof of his true superiority; since not to be overcome cost me a perpetual struggle. (III, 305)

主人公は、もう一人のウィルソンの反抗に、強い態度で対応しているふりをしていたが、実際は恐れていた。主人公は、もう一人のウィルソンが、自分よりも力が優勢であったり、簡単に主人公の力と拮抗させることもできると考えていたが、そのことについて次のようにも述べている。

Yet this superiority—even this equality—was in truth acknowledged by no one but myself; our associates, by some unaccountable blindness, seemed not even to suspect it. Indeed, his competition, his resistance, and especially his impertinent and dogged interference with my purposes, were not more pointed than private. (III, 305-306)

主人公は、もう一人のウィルソンが主人公よりも優勢な立場であることに、周りの級友たちは気づいていないと感じていた。それどころか、もう一人のウィルソンの主人公への競争や反抗、干渉なども級友たちにわかるように示されることはなかった。

もう一人のウィルソンの行動は、実に巧妙なものであった。その巧妙さに、主人公はどう対処してよいのかわからず苦戦しているようなのである。

主人公はもう一人のウィルソンとたびたび口論したが、そのときに感じたもう一人のウィルソンの巧妙さを次のように述べている。

We had, to be sure, nearly every day a quarrel in which, yielding me publicly the palm of victory, he, in some manner, contrived to make me feel that it was he who had deserved it; (III, 306-307)

もう一人のウィルソンは、人前では主人公が口論に勝ったように見せながら、実際はもう一人のウィルソンが勝ったのだと、主人公だけに思わせるという巧

妙なやり方をしたと述べられている。さらに主人公は、もう一人のウィルソンがどのように主人公のやることに干渉してきたのか次のように述べている。

I have already more than once spoken of the disgusting air of patronage which he assumed toward me, and of his frequent officious interference with my will. This interference often took the ungracious character of advice; advice not openly given, but hinted or insinuated. I received it with a repugnance which gained strength as I grew in years. (III, 310)

この言葉からもやはり主人公は、もう一人のウィルソンの公然とした干渉や忠告ではなく、何となく示される干渉や忠告に苦戦し、恐怖や脅威を感じていたことが理解できる。

さらに主人公は次のように述べている。

[T]here were times when I could not help observing, with a feeling made up of wonder, abasement, and pique, that he mingled with his injuries, his insults, or his contradictions, a certain most inappropriate, and assuredly most unwelcome *affectionateness* of manner. I could only conceive this singular behavior to arise from a consummate self-conceit assuming the vulgar airs of patronage and protection. (III, 306)

もう一人のウィルソンは、主人公のやることに敵意をもって反抗しながらも、時々、善意があるという、どのように判断すべきかわからない行動をした。このことがなおさらもう一人のウィルソンを相手にするときの困難さをもたらしたのではないだろうか。

後年、主人公は、少年時代のことを思い出し、もう一人のウィルソンの忠告を素直に聞いていれば、もう少し幸せになっていたであろうと次のように言っている。

[A]t this distant day, let me do him the simple justice to acknowledge that I can recall no occasion when the suggestions of my rival were on the side of those errors or follies so usual to his immature age and seeming inexperience; that his moral sense, at least, if not his general talents and worldly wisdom, was far keener than my own; and that I might, to-day, have been a better, and thus a happier man, had I less frequently rejected the counsels embodied in those meaning whispers which I then but too cordially hated and too bitterly despised. (III, 310)

おそらく、少年の頃の主人公も、もう一人のウィルソンの忠告にどこか正論が混ざっていることを無意識的に感じていた可能性がある。もう一人のウィルソンの忠告や反抗、そして抵抗のなかに存在する正論を突きつけられることで、主人公は自分の過ちを否認なしに意識させられたのではないだろうか。心のどこかにわずかながらにあった自らの悪行への後ろめたさが、もう一人のウィルソンに抵抗する上で、障害になっていた可能性も考えられる。しかも、主人公はもう一人のウィルソンに悩まされながらも、次のように述べている。

It may seem strange that in spite of the continual anxiety occasioned me by the rivalry of Wilson, and his intolerable spirit of contradiction, I could not bring myself to hate him altogether. (III, 306)

主人公は、もう一人のウィルソンのことを明確に憎みきれない感情ももっている。憎みながら、憎めないというあやふやな気持ちも、主人公が、もう一人のウィルソンに立ち向かうための大きな障害になっていたのであろう。主人公は、さらに次のように述べている。

[A] sense of pride on my part, and a veritable dignity on his own, kept us always upon what are called “speaking terms,” while there were many

points of strong congeniality in our tempers, operating to awake in me a sentiment which our position alone, perhaps, prevented from ripening into friendship. It is difficult, indeed, to define, or even to describe, my real feelings towards him. They formed a motley and heterogeneous admixture;—some petulant animosity, which was not yet hatred, some esteem, more respect, much fear, with a world of uneasy curiosity. To the moralist it will be unnecessary to say, in addition, that Wilson and myself were the most inseparable of companions. (III, 307)

主人公は、もう一人のウィルソンと口を利き合う関係にあり、完全に関わりを絶つことができなかつたようである。関わりをもつからこそ、相手の言動が気になり、嫌悪感や憎悪を抱くのだが、なぜか関わりをもってしまう状況や関係にあったのだと思われる。

そして、もう一人のウィルソンへの感情は嫌悪感だけでなく、尊敬も含まれているということも述べている。憎悪を感じながらも敬意ももっていたことも主人公が、もう一人のウィルソンの競争や抵抗、干渉に対抗するための障害になっていたのだと思われる。

もう一人のウィルソンが、明確に主人公への敵意や悪意を示し、善意や正しい忠告が微塵もなければ、主人公も完全に相手を憎むことができたであろう。そうすれば反撃する気持ちをもてたと思われる。

ポーが、もう一人のウィルソンの言動をこのように描き、その言動に苦しめられる主人公を描いたのは、ポー自身が現実の世界で、もう一人のウィルソンのような曖昧で、巧みな言動をする他者を苦手としていたことの表れだと思われる。

3

主人公は、ブランズビー校長の学校を去り、もう一人のウィルソンからようやく離れられる。やがてイートンに通うようになった主人公は、放蕩の日々

を送るようになった。ある時、悪友たちと飲みあかし、明け方近くになった頃、もう一人のウィルソンは不意に現われ、主人公の耳元で“William Wilson!” (III, 314) とささやいた。

そのささやきには、主人公に戒告を与える語調があり、もう一人のウィルソンとの過去の日々を思い起こさせる響きがあった。主人公は、大きな衝撃を受けたが、もう一人のウィルソンはすぐに姿を消した。

その後、大学へと進んだ主人公は、カードゲームでいかさまを使い、大金持ちの大学生、グレンディニング卿 (Lord Glendinning) を騙そうとする。しかし、突然表れたもう一人のウィルソンは主人公の悪巧みを次のように暴露する。

“Gentlemen, I make no apology for this behaviour, because in thus behaving, I am but fulfilling a duty. You are, beyond doubt, uninformed of the true character of the person who has to-night won at *écarté* a large sum of money from Lord Glendinning. I will therefore put you upon an expeditious and decisive plan of obtaining this very necessary information. Please to examine, at your leisure, the inner linings of the cuff of his left sleeve, and the several little packages which may be found in the somewhat capacious pockets of his embroidered morning wrapper” (III, 319)

もう一人のウィルソンのこの言葉を聞き、周りにいた者たちが主人公を調べ、悪巧みは露見した。ここで注目すべきことは、もう一人のウィルソンの主人公への批判が、かつてのように主人公にしかわからないものではなく、周りの人間に明確にわかるものになったということである。もう一人のウィルソンが主人公の悪事を暴露したことで、主人公は大学にいられなくなる。主人公の悪事は、これまでの悪ふざけ程度のものから、本当の悪事へ変わっていたが、そうなったとき、もう一人のウィルソンの主人公への攻撃も、周りの人たちにはっきりとわかるものに変化している。その後、主人公は、もう一人のウィルソンから逃げるかのようにさまざまな国へ行くが、どこへ

行っても悪事をもう一人のウィルソンによって妨げられる。

もう一人のウィルソンの妨害が幾度も続くと、主人公は次のように考えるようになる。

Thus far I had succumbed supinely to this imperious domination. The sentiment of deep awe with which I habitually regarded the elevated character, the majestic wisdom, the apparent omnipresence and omnipotence of Wilson, added to a feeling of even terror, with which certain other traits in his nature and assumptions inspired me, had operated, hitherto, to impress me with an idea of my own utter weakness and helplessness, and to suggest an implicit, although bitterly reluctant submission to his arbitrary will. But, of late days, I had given myself up entirely to wine; and its maddening influence upon my hereditary temper rendered me more and more impatient of control. I began to murmur,—to hesitate,—to resist. And was it only fancy which induced me to believe that, with the increase of my own firmness, that of my tormentor underwent a proportional diminution? Be this as it may, I now began to feel the inspiration of a burning hope, and at length nurtured in my secret thoughts a stern and desperate resolution that I would submit no longer to be enslaved. (III, 322-323)

すでに述べてきたように、主人公は、もう一人のウィルソンの曖昧な攻撃のときは、何度攻撃されても、心の底から対抗する覚悟をもてていなかった。しかし、明確な攻撃になった後は、上に引用したように徐々に対抗する気持ちをもてるようになっていく。しかも、主人公が強い態度で出れば出るほど、もう一人のウィルソンの力は弱まっていくように主人公は感じている。

ナポリの老貴族、ディ・プロリオ公爵 (Duke Di Broglio) の屋敷で開かれた仮面舞踏会で、主人公は良からぬ目的で老貴族の若い妻に近づこうとした。しかしそれを妨げようとして突如として表れたのがもう一人のウィルソンで

あった。主人公は激情にかられ、次のように叫ぶ。

“[S]coundrel! impostor! accursed villain! you shall not—you *shall not* dog me unto death! Follow me, or I stab you where you stand!” (III, 324)

そして、もう一人のウィルソンと決闘するが、主人公はその様子を次のように述べている。

I was frantic with every species of wild excitement, and felt within my single arm the energy and power of a multitude. In a few seconds I forced him by sheer strength against the wainscoting, and thus, getting him at mercy, plunged my sword, with brute ferocity, repeatedly through and through his bosom. (III, 324)

怒りと憎悪のためであろうが、主人公はそれまで抱いていた相手への恐れを一切忘れている。それが激情にかられ、かっとなってしてしまった殺人であっても、もう一人のウィルソンに勝ったという事実は変わらない。曖昧で、他人には見えにくく、わかりにくい攻撃には反撃できなかったが、正面きっての明確な攻撃には反撃できるという主人公の特性を知ることができる。

主人公は、もう一人のウィルソンを殺害してしまうが、もう一人のウィルソンは死ぬ間際に次のように言う。

“*You have conquered, and I yield. Yet, henceforward art thou also dead—dead to the World, to Heaven and to Hope! In me didst thou exist—and, in my death, see by this image, which is thine own, how utterly thou hast murdered thyself.*” (III, 325)

もう一人のウィルソンが言ったこの言葉は真実であると思われる。おそらく主人公はもう一人のウィルソンを殺害したことで、道徳的良心的な部分を失い、精神的な死を迎えることになるであろう¹³。

他者の曖昧な言動に対する恐怖は、果てしない憎悪を生み、その憎悪は主人公を苦しめた。そしてようやくその憎悪の根源を滅ぼせたが、同時に自らも破滅したのである。

4

ポーは、しばしば、特定の人物や動物、物などに異常にこだわる登場人物たちを描く。彼らは、異常にこだわる対象から、存在しない妄想を作り出し、ありもしない呪縛に縛られる。その呪縛から逃れられなくなったかのように思い込み、最後は極端な行動に走り、自滅する。

「ウィリアム・ウィルソン」の主人公にもそれは当てはまり、他のいくつかの短編の登場人物たちにもそういう傾向が見られる。

「アッシャー家の崩壊」(‘The Fall of the House of the Usher’, 1839) のロ德里ック・アッシャー (Roderick Usher) は、自らの住む先祖代々の屋敷や、その周辺の池などが発する不確で迷信的な影響に縛られている。語り手はロ德里ック・アッシャーの様子を次のように述べている。

He was enchained by certain superstitious impressions in regard to the dwelling which he tenanted, and whence, for many years, he had never ventured forth—in regard to an influence whose supposititious force was conveyed in terms too shadowy here to be re-stated—an influence which some peculiarities in the mere form and substance of his family mansion, had, by dint of long sufferance, he said, obtained over his spirit—an effect which the *physique* of the gray walls and turrets, and of the dim tarn into which they all looked down, had, at length, brought about upon the *morale* of his existence. (III, 280-281)

しかし、それよりももっと強く心を束縛されている原因は、妹、マデライン (Madelaine) の存在と、その病であった。語り手は、次のようにも述べている。

He admitted, however, although with hesitation, that much of the peculiar gloom which thus afflicted him could be traced to a more natural and far more palpable origin—to the severe and long-continued illness—indeed to the evidently approaching dissolution—of a tenderly beloved sister—his sole companion for long years—his last and only relative on earth. (III, 281)

彼女の抱える病気は医者も治せない特異なものであり、明瞭ではないその奇怪さが、ロデリック・アッシャーの心を縛りつけている。ロデリック・アッシャーは、妹が死んでしまえば、自分が唯一のアッシャー家の血筋になってしまうという考えに束縛され、恐怖の妄想をかき立てる。

やがてマデラインは、病気のために息を引き取ったと思われた。ロデリック・アッシャーは、語り手の助けをかりて、妹の遺体を入れた棺を屋敷内の安置所におさめた。数日が経ち、ある不気味な晩に、ロデリック・アッシャーと語り手は奇妙な物音を聞く。物音にすっかり怯えたロデリック・アッシャーは妹を生きのまま棺に入れてしまったことを語り手に打ち明ける。ロデリック・アッシャーは次のように言う。

We have put her living in the tomb! Said I not that my senses were acute? I now tell you that I heard her first feeble movements in the hollow coffin. I heard them—many, many days ago—yet I dared not—I dared not speak!
(III, 296)

この台詞はマデラインが棺から出てきて、語り手とロデリック・アッシャーのいる部屋の扉の前までやってきたときに、ロデリック・アッシャーが語り手に話した言葉である。ロデリック・アッシャーは、マデラインを棺におさめてからかなり早い段階で彼女が生きていることに気づいたようなのである。気づいた段階で、すぐに棺から出していれば、このような恐怖に襲われることはなかった。しかし、マデラインが棺のなかで生きていると考え、恐

怖にかられているだけで、その恐怖や不安を取り除く努力はしない。その結果、最終的にマデラインが棺からはい出てきて、ロデリック・アッシャーの上のしかかるように倒れ込み、ロデリック・アッシャーは息絶え、屋敷も崩壊する。

「黒猫」の語り手も、最初に飼った黒猫プルートーや次に飼った黒猫の曖昧な言動に対して極端な行動しかできない。語り手は、プルートーを殺して幾月か経った後、酒場で見つけた黒い猫を飼うことになった。しかし、やがてその猫の存在や行動に恐怖や憎悪を感じるようになる。猫は何気ない普段の行動をしているだけだが、その行動について、さまざまな考えをもつようになる。そして恐怖と嫌悪の気持ちを日に日に強めていくが、最初に飼った猫を残酷なやり方で殺してしまったという後ろめたさもあって、黒猫のなすがままに任せている。しかし、ついにその憎悪の感情を抑えきれなくなることが起こり、猫を殺そうとする。

そういう極端な行為に出る前に、対処する方法はあったはずである。黒猫を見るのが嫌で、恐怖や憎悪を感じるのであれば、黒猫を家から追い出すこともできたであろうし、他の誰かにあげることもできたはずなのである。しかし、語り手は、苦悩を取り除く簡単な方法を模索することなく、ただ毎日、猫を見て、恐怖感と嫌悪感を心のなかに募らせていくだけで、最終的な破滅につながる極端な行動をするまで何もしない。

「ウィリアム・ウィルソン」の主人公も、もう一人のウィルソンの曖昧な言動に脅威や憎悪を感じながらも何も対処せず、憎しみだけをため込んでいき、最後にはそれを爆発させ、破滅する。

「ウィリアム・ウィルソン」の主人公は、もう一人のウィルソンの曖昧な言動や攻撃に苦悩しているが、実は、主人公自身も曖昧な言動をしている。主人公は、もう一人のウィルソンに対して攻撃するとき、どのようにしたかを次のように述べている。

It was no doubt the anomalous state of affairs existing between us, which turned all my attacks upon him, (and they were many, either open or

covert) into the channel of banter or practical joke (giving pain while assuming the aspect of mere fun) rather than into a more serious and determined hostility. (III, 307)

本当は、もう一人のウィルソンに対して主人公は、正々堂々と真っ正面から向き合うべきであった。しかし、その勇気がなく、悪ふざけや冗談を装って、密かに相手に攻撃をするという卑怯なやり方しかできなかった可能性もある。となると、もう一人のウィルソンの主人公への曖昧で巧妙な攻撃も主人公自身の行動を反映しているものに過ぎないようにも思える。あるいは、主人公自身が卑劣なやり方でもう一人のウィルソンに攻撃しているために、相手も自分と同じように卑劣なやり方で攻撃してきているに違いないと疑心暗鬼になっているだけかもしれない。

正々堂々と向き合わない主人公の特徴は、「黒猫」の語り手とも重なる。語り手は二番目に飼った猫の行動を異常に気にするようになり、その行動の一つ一つに嫌悪と憎悪を抱くようになる。自分のところに寄ってくるその黒猫を心のなかで嫌悪しながらも、その感情を心にしまい込み、隠そうとする。

黒猫が寄ってくるのが嫌なら、寄ってきた黒猫を寄ってくるたびに退ければ良いのである。黒猫が語り手の服に爪をかけ、体をよじ登ってきたら、猫をどけ、軽く叱れば良いのである。しかし、憎悪と嫌悪の気持ちを強く感じながらも、その感情を心に隠すだけで、猫のなすがままに放置している。結局は、黒猫と向き合う勇気がなく、ただひたすら黒猫から逃げようとしていただけなのだ。向き合う勇気がないため、憎悪をため込むだけため込み、ついにそれを押さえきれなくなったとき、感情を爆発させ極端な行動に出てしまう。

「ウィリアム・ウィルソン」の主人公が、もう一人のウィルソンと向き合う勇気をもたず、その干渉や妨害を恐れて、逃げ回っていた拳句に、最終的に憎悪と怒りを爆発させ、もう一人のウィルソンを殺害してしまうのと似ている。

「ウィリアム・ウィルソン」の主人公が、もう一人のウィルソンの干渉か

ら逃れる方法は一つだけあった。悪行をしなければ、もう一人のウィルソンは決して主人公に対抗や干渉、妨害などはしてこない。しかし、悪行をしたいという欲望は、主人公にとって身体の一部といってもいいほどのものであり、捨てることができない欲望でもあった。そのため、この欲望をどうすることもできず、もう一人のウィルソンから逃れるには、殺害するしかなかったのであろう。となると、破滅は必然的なものであったのかもしれない。

自滅する生き方は実際のポーの生き方にも見られる。ポーは仕事に嫌気がさし、生活が怠惰になったり、酒浸りになったりして¹⁴、生活が不規則になることがよくあった。仕事も休みがちになることもあり、雇い主と考え方の違いなどで不仲になったりした。そして、一つの仕事が長続きしなかった¹⁵。ポーには、わがままなところや、移り気なところ、怒りっぽいところがあった。また無意味に世間に敵を作ったりするところもあり、その生き方は破滅を招くものであった¹⁶。自滅を招く生き方という点が登場人物たちと重なるのである。

5

ポーは、「ウィリアム・ウィルソン」の主人公を通して、自分が人間関係のなかで、苦手とした他者の行動を描きだした。主人公の悪事が、子供の悪ふざけ程度のものであった頃は、もう一人のウィルソンが具体的にどのような主人公に反抗し、対抗し、干渉してきたのか具体的に表現できないほど不確かなものであった。そのため、もう一人のウィルソンの主人公への言動に悪意や敵意があったのか、あるいは本当に反抗し、攻撃してきたのかさえも確証がもてない。

物語は主人公の視点で語られているため、客観的で公平な見方ではない。主人公自身の思い込みということも考えられる。もう一人のウィルソンの言動が曖昧で明確ではなかったために、それが主人公の妄想を作り出し、何気ない言動を悪く解釈し、恨んだとも考えられる。主人公の語るもう一人のウィルソンの言動は、しばしば曖昧で意味がわかりにくい。完全な悪意があるか

と思うと、善意が混ざっていたりする。主人公はもう一人のウィルソンのことを完全に憎みながらも、あるときは完全には憎み切れない気持ちがあると言ったりもする。

しかも、もう一人のウィルソンの言動には、本当に主人公に対する悪意があったのか疑わせるようなところも見られる。主人公は、たびたびもう一人のウィルソンの対抗に悩まされ、憎悪を抱くようになるが、その感情をもう一人のウィルソンが感じ取ると、もう一人のウィルソンの様子に少し変化が見られたと次のように言っている。

[I]n the first years of our connexion as schoolmates, my feelings in regard to him might have been easily ripened into friendship: but, in the latter months of my residence at the academy, although the intrusion of his ordinary manner had, beyond doubt, in some measure, abated, my sentiments, in nearly similar proportion, partook very much of positive hatred. Upon one occasion he saw this, I think, and afterwards avoided, or made a show of avoiding me. (III, 310)

主人公の憎悪に気づくと、もう一人のウィルソンは主人公を避けるようになったように思われると書かれている。もし、もう一人のウィルソンが、本当に主人公に敵意を抱き、苦しめようと考えていれば、主人公の憎悪を知って、避けるようになるだろうか。もし、敵意があるのなら、もう一人のウィルソンの言動が主人公を苦しめていることがわかれば、目的は達成され、敵意のある対抗や干渉をさらにしてきたであろう。しかし、そうではなく、避けるようになったと見えたということは、主人公の憎悪にむしろ驚き、なぜ悪意を抱かれているのか理解できず、避けるようになった可能性もある。もう一人のウィルソンは主人公を怒らせるような言動をしているつもりはなく、何気ない普段の言動をしているだけで、知らず知らずのうちに恨まれていたとも考えられる。

「黒猫」でも、黒猫の行動に異常に反応する語り手が描かれている。語り

手は、いつしか酒により精神状態が荒む日々を送るようになる。

ある晩、町の酒場から酒に酔って帰ってきた語り手は、黒猫プルートルが自分を避けているような気がした。語り手は次のように述べている。

One night, returning home, much intoxicated, from one of my haunts about town, I fancied that the cat avoided my presence. (V, 145)

黒猫が、本当に避けていたかどうかはわからない。語り手の思い込みということも考えられる。語り手は、黒猫のそういった行動を悪く解釈し、猫を乱暴に掴む。驚いた猫が語り手の手をひっかいたことから、激怒して、猫に残虐なことをしてしまう。何日かして、語り手は、その黒猫を殺してしまう。

その後、別の猫を飼うようになる。しかし、すでに述べたように、その別の猫の行動も事細かに気にするようになり、自分勝手な考え方のもとで、憎悪や嫌悪感、恐怖心をもつようになる。語り手は“[T]hat the terror and horror with which the animal inspired me, had been heightened by one of the merest chimæras it would be possible to conceive.” (V, 150) と述べている。その黒猫の胸の辺り一面に広がる白い斑点が、語り手には恐怖を抱かせる形に見えてくる。しかし、語り手のこういった感情は、思い込みや想像で作りに上げられた妄想から引き起こされた恐怖や憎悪である可能性もある。恐怖や憎悪を募らせていった語り手は、ついにその感情を抑えきれなくなるようなことが起こったときに、猫を殺そうとするが、それを止めようとした妻を殺してしまう。それは露見し、語り手は破滅する。

「群衆の人」(‘The Man of the Crowd’, 1840) では、語り手は、ロンドンで、ある老人を見かける。その老人が非常に気になった語り手は、その老人の表情からさまざまな概念を抱く。そしてその老人の後をつけていく。その老人はゆっくり歩いているかと思うと、突然、早足で歩き出したりする。表情も意気揚々となったり、急に意気消沈して暗い表情になったりもする。その行動は予測不能で、どういう目的で行動しているのか見当がつかなかった。そのためかえって語り手は興味をもった。そしてなぜそのような行動をするの

か納得のいく理解が得られるまでは、老人から目を離すことができなくなった。語り手は、老人をつけ回し、その行動を分析する。

「群衆の人」の語り手も「黒猫」の語り手と同様に、他者の行動が理解できないと、異常なまでに気になり、自分なりの考えに耽り、妄想を広げていく。そして自分の分析に確信をもってようやく、老人から離れることができるのだが、語り手の確信には何ら根拠はなく、勝手に作り上げられた妄想の可能性が高い。

「告げ口心臓」(‘The Tell-Tale of Heart’, 1843)では、語り手は老人を殺害し、遺体を床下に隠す。警官がやってきたとき、遺体は完全に隠されていたため、警官は少しも語り手に疑いをもたなかった。すっかり勝ち誇った気持ちになった語り手は、警官たちに椅子を勧め、自身も椅子に座わり、談笑を始めた。語り手の座っている椅子の真下には老人の遺体があった。しばらくは談笑をしていたが、やがて語り手は、落ちつかない気持ちになり、警官たちに早く帰ってもらいたいと思うようになる。そして音が聞こえるような気がしてくる。やがてその音は警官たちにも聞こえているのではないかと思ひ込むようになる。語り手は次のように考え、見当はずれな妄想を肥大化していく。

They heard!—they suspected!—they *knew!*—they were making a mockery of my horror!—this I thought, and this I think. But anything was better than this agony! Anything was more tolerable than this derision! I could bear those hypocritical smiles no longer! I felt that I must scream or die! and now—again!—hark! louder! louder! louder! *louder!* (V, 94)

語り手は、音が聞こえるという妄想に囚われ、警官たちにも聞こえていて、自分のことを殺人犯だと疑っているに違いないと考えるようになる。その恐怖に耐えきれず、自らが老人を殺害したことを告白してしまう。

ポーは、ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882) に剽竊の疑いをかけて非難したことがあった。これはポーの完全な言いがかりであったようである¹⁷。ポーは、自分の思い込みや妄想で、ロングフェローが

剽竊したと考え、非難した可能性がある。そう考えれば、個人の考えに埋没し、自分勝手な考えのもとに勝手な解釈をしたポーの作品の登場人物たちとどこことなく似ている。

ポーは、たびたび世間における他者と対立し、不仲になった。ポーにもそれなりの事情や言い分もあったであろうし、その時々さまざまな状況にもよるため、ポーだけを一方的に非難することはできない。しかし、ポーには作品の登場人物たちのように勝手な空想を抱き、それを信じ込むことで、憎悪を抱いたりする特徴もあった可能性がある。

特に、他者の曖昧で微妙な言動や何気ない態度に異常に反応し、悪い想像力を働かせて脅威や恐怖を感じる登場人物たちを描くのは、ポー自身がそういったものに過敏に反応してしまう自分自身の欠点を自覚していたからではないだろうか。明確でない曖昧な言動をされると、そこから妄想が広がり、時に存在しない敵意や悪意を勝手に想像してしまい、それをどうすることもできず苦悩し、そのあげく破滅を招くような行動をしてしまうのだと思われる。

しかし、ポーは「早まった埋葬」(‘The Premature Burial’, 1844)で、不確かな妄想の危険から抜け出す方法も見出している。この短編では、強硬症という病気に悩む語り手が登場する。この病気の発作に襲われると、死んでしまったような状態になる。そのため、この発作にかかることで、他人から死んだものと思われ、生きたまま埋葬されてしまうのではないかと恐れていた。生きたまま埋葬されるという考えが、恐怖心を呼び、それが果てしなく恐ろしい妄想を生み出す。

あるとき、語り手は、目覚めると、自分がどこで目覚めたのかわからなかった。周りの状況は、墓のなかを連想させるものばかりであった。そのため、どこかの土地で、強硬症の発作を起こし、他人からは死んでしまったものと思われ、埋葬されてしまったのではないかと考える。語り手は、激しい恐怖心に襲われる。

しばらくして、それは全くの勘違いであり、埋葬されてはいなかったことがわかる。語り手はそれまでは、生きたまま埋葬されてしまう恐怖をただ想

像するしかなかった。しかし、勘違いであったとはいえ、本当に埋葬されてしまったと思ひ込む状況に一旦置かれたことで、生きたまま埋葬されてしまう本当の恐怖を経験した。語り手は、次のように述べている。

The tortures endured, however, were indubitably quite equal, for the time, to those of actual sepulture. They were fearfully—they were inconceivably hideous; but out of Evil proceeded Good; for their very excess wrought in my spirit an inevitable revulsion. My soul acquired tone—acquired temper. I went abroad. I took vigorous exercise. I breathed the free air of Heaven. I thought upon other subjects than Death. … In short, I became a new man, and lived a man’s life. From that memorable night, I dismissed forever my charnel apprehensions, and with them vanished the cataleptic disorder, of which, perhaps, they had been less the consequence than the cause. (V, 273)

語り手は、本当の恐怖を一度経験したことにより、逆に、生きたまま埋葬されてしまうのではないかという妄想が引き起こす恐怖を克服することができた。

それにより、積極的に外に出るようになり、運動もするようになる。健康的な生活をするようになると、これまでのように可能性が曖昧で明瞭でない妄想に苦しめられることもなくなり、強硬症の発作もなくなる。語り手は、強硬症の病気の原因は、自分の妄想が引き起こす恐怖心であったと考えるようになり、妄想を抱くことの危険性を知る。

この短編から理解できるようにポーは、不確かなことや曖昧なことに対して抱く妄想の危険性を理解し、それを克服する方法も理論上では見つけ出していた。しかし、実際の生活では、理論は通用せず、「ウィリアム・ウィルソン」の主人公のように他者から曖昧な言動をされると、それらと真正面から向き合う勇気をなくし、他者の曖昧な言動から引き起こされる妄想に苦しめられ、自滅を招くような言動をしてしまう自分の特徴をどうすることもでき

きなかった。

他者の曖昧な言動に苦しめられたウィリアム・ウィルソンは、ポー自身であったのである。

註

1. Patrick F. Quinn, 222-223 参照

2. Patrick F. Quinn, 223 参照

Hoffman, 210-211 参照

3. Hoffman, 210 参照

Levin, 142 参照

4. Jeffrey Meyers は次のように指摘している。

The sharp inward division between the impressive force of Poe's rational mind and the overpowering strength of his irrational apprehension was reflected not only in his poems and stories but also in his conflict with authority, his anxious welcome of personal disaster and his sad compulsion to destroy his own life. Poe portrays his divided personality in his autobiographical tale, "William Wilson."

Meyers, 57

5. 谷崎、102 参照、Buranelli, 34 参照、Meyers, 57 参照

しかし良心ではないという見方もある。Edward H. Davidson は次のように述べる。

[T]he whispering voice of another boy also named William Wilson is not really a moral conscience (for conscience depends on some spiritual determinant in order to have any force at all) but is merely another being in the moral wilderness of Wilson's life.

Davidson, 199

さらに前田陽子はもう一人のウィルソンのことを「分身は、道徳的観点から見た良心というよりは、自分に都合の悪い特性、それゆえに嫌っている自己の人格の一部といえよう」と指摘する。前田、124

6. Hoffman, 213
7. 本論におけるテキストからの引用は、Edgar Allan Poe. *The Complete Works of Edgar Allan Poe*. Ed. James A. Harrison. New York : AMS Press Inc, 1965. の全集からのものとし、引用文末に巻数と頁数を記す。
8. 野口、183
9. 野口、183
10. Buranelli, 33-34 参照
11. Patrick F. Quinn は、もう一人のウィルソン（第二のウィルソン）は、主人公の言葉以外には存在している証拠はなく、精神的投影にすぎないと言う。
Patrick F. Quinn, 221
12. 高島、112-113 参照
13. Buranelli, 76、Meyers, 57、Levin, 143 参照
14. ポーは『サザン・リテラリー・メッセンジャー』誌 (*Southern Literary Messenger*) で仕事をしていた時期 (1835年8月から1837年1月) があった。佐伯、3巻 852-853 参照
同誌の社長ホワイト (Thomas Willis White, 1788-1843) は、一時期、生活が怠惰になったポーに暇を出した時があった。宮永、175 参照
ホワイトは、1835年9月29日にポーに飲酒を戒める手紙を書いている。手紙の全文は、*The Complete Works of Edgar Allan Poe*. XVII, 20-21 を参照のこと。ポーが墮落する原因の一つに飲酒があったと考えられる。
ポーのことを知っている人間のなかには、ポーが酒に溺れることや、怠惰な生活をするを指摘する人物もいるが、その一方で酒に酔った姿を見たことがないとか、勤勉で紳士的な人物であったというような意見を述べる人物もいる。宮永、190-192, 274, 279-280 参照
15. 宮永、参照
16. ポーの性格や言動には破滅を招く要素が多い。
ポーの士官学校時代の同級生は、ポーの学問のすぐれた才能を認めながらも、ポーのわがままな性格や移り気な性格を指摘している (宮永、

115-116 参照)。また、ポーに親切にし、仕事のことや、金銭面で援助をしたケネデー (John Pendleton Kennedy, 1795-1870) もポーのだらしなさ、怒りっぽい性格やすぐに職を投げ出してしまう特徴を指摘している (宮永、186 参照)。

ポーは、自分では他の作家の作品の一部を借用したり、応用したりなどして作品を書くことがあった。しかし他の作家が自分と同じことをすると非難した。ポーはロングフェローのことを剽竊の疑いで激しく非難した。この疑いは全くの事実無根であったようである (佐伯、1 巻 676-677 参照、佐伯、2 巻 639-640 参照)。

それ以外にも、ポーはあまり望みのなさそうな政府の仕事を得るためにワシントンに出かけながらも酒浸りになったり、わずかな原稿料の催促をたびたび行い詩人ローエル (James Russell Lowell, 1819-1891) を怒らせたりした。知人たちからは、ポーが破滅に向かって進んでいるように見えたということである (佐伯、2 巻 647 参照)。

17. 佐伯、2 巻 640 参照

Works Cited

- Buranelli, Vincent. *Edgar Allan Poe*, Second Edition, Boston: Twayne Publishers, A Division of G.K. Hall & Co., 1977.
- Davidson, Edward H. *POE: A Critical Study*, Cambridge : The Belknap Press of Harvard University Press, 1957.
- Hoffman, Daniel. *POE POE POE POE POE POE POE*, New York: Anchor Press, Doubleday & Company, 1973.
- Levin, Harry. *The Power of Blackness; Hawthorne, Poe, Melville*, New York: Alfred A. Knopf, 1970.
- Meyers, Jeffrey. *Edgar Allan Poe: His Life and Legacy*, New York: Charles Scribner's Sons, 1992.
- Poe, Edgar Allan. *The Complete Works of Edgar Allan Poe*. Ed. James A. Harrison.

New York : AMS Press Inc, 1965.

Quinn, Arthur Hobson. Edgar Allan Poe: A Critical Biography, New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1969.

Quinn, Patrick F. *The French Face of Edgar Poe*, Carbondale: Southern Illinois University Press, 1957.

板橋好枝、野口啓子 編『E.A ポーの短編を読む；多面性の文学』東京；勁草書房、1999年。

——前田陽子「第五章 復讐のパラドックス——自己と分身の葛藤」

高島清『小説家ポオ』東京；国書刊行会、1995年。

谷崎清二『エドガー・ポオ——人と作品』東京；研究社、昭和57年。

佐伯彰一、福永武彦、吉田健一 編『ポオ全集第1巻』東京；東京創元社、1990年。

佐伯彰一、福永武彦、吉田健一 編『ポオ全集第2巻』東京；東京創元社、1991年。

野口啓子『後ろから読むエドガー・アラン・ポー——反動とカラクリの文学』東京；溪流社、2007年。

宮永孝『文壇の異端者；エドガー・アラン・ポーの生涯』東京；ゆまにて出版、1979年。

本稿は、平成24年6月9日に岡山市立中央公民館で開催された日本比較文化学会第34回全国大会で口頭発表したものに加筆修正したものである。また、口頭発表の際のタイトルは「エドガー・アラン・ポーが苦手とする他者の巧妙で曖昧な行動：「ウィリアム・ウィルソン」を中心に」であったが、本稿では「エドガー・アラン・ポーが苦手とする他者の巧妙で曖昧な言動：「ウィリアム・ウィルソン」を中心に」に変更した。